

# 大東文化大学 東洋研究所所報

2022.7 No.77

## 目次

東洋研究所「暦学班」の25年 専任研究員 小林春樹……………1	2022年度 東洋研究所名簿……………9
2022年度 東洋研究所共同研究課題……………2～3	新刊案内……………10
2021年度 東洋研究所共同研究班活動報告…4～7	2021年度発行 『東洋研究』……………11
東洋研究所国際交流講演会開催一覧……………8	2022年度 秋の公開講座のお知らせ……………12

## 東洋研究所「暦学班」の25年

東洋研究所 専任研究員 小林 春樹

筆者が大東文化大学東洋研究所に専任講師としての職を与えられたのは1997年、すなわち今から25年前、換言すれば四半世紀も前のことであり、当時の東洋研究所所長 遠藤光正先生を主任（班長）として新設された研究班である通称「暦学班」の一員としてであった。ちなみに当時の暦学班の研究対象は、国立天文台にのみ所蔵されている逸存書である『注定付之事』であり、それは中国では唐の長慶2年（822）から景福1年（892）までの70年間、日本では貞観4年（862）から、江戸幕府5代将軍の徳川綱吉の貞享元年（1684）までの822年間という異例の長期にわたって施行された「宣明暦」にもとづいて日月触の発生を予測するための計算方法を記した文献であった。また、暦学班が最初に東洋研究所から上梓した著作である『宣明暦 注定付之事の研究』（1997年3月、以下発行年次のみを記す）は難解な『注定付之事』を訓読し、注釈等を施した著作であったが、いまその冒頭部分を一瞥するだけでも当該書は、「半用刻率」というようなテクニカルタームが頻出する日触計算法が記された書物であった。しかも当時における唯一の導きの糸ともいべき『大漢和辞典』には天文、暦学関係の用語が全くと言ってよいほど採録されておらず、かつ当時の暦学班には神田泰氏以外には暦算の専門家がいなかったという状況のなかで、ともかくも上掲書の刊行を実現し得たことは、譬えて言えば、杉田玄白らによる『解体新書』の翻訳作業に通底する努力を想定したくなる思いが、刊行まぢかな二月の雪の降る夜、印刷会社の出張校正室で校正作業をしていたわが身の姿とともに湧きあがってくる。

そのような暦学班の研究活動は、筆者と同年度に暦学班に参加された陰陽道研究の第一人者である山下克明氏の提案もあって、当時、学界の注目を集めつつあった京都府立総合資料館（現、京都学・暦彩館）所蔵の「若杉家文書」の一部であり重要な「天文占」書

である「三家簿讚」と「五行占」書である「雑怪事占法」を中心とした占書資料（史料）へ漸次移行してゆき、その成果として、「若杉家文書『三家簿讚』の研究」（2002）、および『若杉家文書「中国天文・五行占資料」の研究』（2007）が上梓されることになった。（傍線は筆者による）ちなみに後者の書名に含まれている「天文・五行占」なる用語は、その後の日本の学界において「天空と地上の森羅万象に関する占いの呼称」として定着しつつあり、そのことは大東文化大学東洋研究所の当該研究班、すなわちこれも暦学班にかわる仮りの呼称ではあるが「天文・暦学班」の一員として筆者がひそかに自負するところである<sup>1</sup>。なお現在天文・暦学班は、これもまた日本の前田尊経閣文庫にのみ所蔵されている貴重な逸存書である、唐の李順風（602～670）が著した天文占書である『天文要録』の訳注を中心とした研究をおこない、今年度刊行予定の「『天文要録』の考察（四）」を以て当該史料の総論、日食、および月食にかかわる部分に関する研究を完成する予定である。

思えば、大学院時代から『史記』や『漢書』などの正史研究を中心課題としていた一東洋史学徒であった筆者が上記のような縁によって25年、すなわち四半世紀にわたり専門外の分野ともいべき研究に携わらせて戴けたこと、そして藪内清先生、渡邊敏夫先生、斎藤国治先生、大谷光男先生、川原秀城先生、中村士先生、小林龍彦先生をはじめとする、数多の碩学にお目にかかれたこと、という得難い体験を財産として今年度を以て大東文化大学東洋研究所を定年退職できることに感謝したいと思う。

（こばやし はるき 東洋研究所専任研究員・教授）

<sup>1</sup> 佐々木聡「中国歴代王朝における天文五行占書の編纂と禁書政策」（『術数学研究の課題と方法』、水口拓寿編、汲古書院、2022、所収）

## 2022 年度 東洋研究所共同研究課題

第1班	<b>中華人民共和国 100 年史研究―日中関係の今後を見据えて</b>
	期間 2022 ～ 2024 年度 (継続)
	<p>メンバー (15 名) 團岡崎 邦彦〔主任〕 団齊藤 哲郎、鹿 錫俊、高田 茂臣 団鏡屋 一、伊藤 一彦、上野 英詞、植松 希久磨、江崎 隆哉、篠永 宣孝、柴田 善雅、嶋 亜弥子、由川 稔、田中 寛、福田 和展</p> <p>概要 研究計画は 3 年間の短期計画 (2019 ～ 2021) と 10 年をかけた長期計画 (2020 ～ 2030) から構成される。計画では、日中関係を含む「中国共産党 100 年史年表」(1921 ～ 2020)、および「中華人民共和国 100 年史年表」(1949 ～ 2048) の二つの百年史年表を研究、整理し、さらに公刊へ向けて準備する。</p> <p>まず、中華人民共和国建国以前の歴史と日中関係について様々な分野から整理し、戦後日中関係において引き継がれた課題を明らかにする。さらに、中華人民共和国建国後については、これを毛沢東の時代 (1949 ～ 1946) と鄧小平の時代 (1978 ～ 2012)、そして習近平の時代 (2012 ～) に分け、それぞれの内政、外交、日中関係について整理していく。そこでは毛沢東の「社会主義の道」、鄧小平が提起した「新たな社会主義と改革開放」、さらに習近平のめざす「中国の特色ある社会主義の新時代」構想、その政策の連続性と問題点について検討する。特に、習近平の中国の「中華振興」、「一路一帯」にみる世界認識と覇権主義、さらに国内における民衆の自由、民主の要求と共産党政治の問題点を明らかにする。</p> <p>なお従来からのテーマ、20 世紀、21 世紀の中国の対外抵抗、対内改革と日本についての歴史研究を継続させるとともに、近年の習近平政権下で行われている世界秩序変更への挑戦 (中華振興) を分析しつつ、日米中によるアジア平和秩序維持のための方策を検討して行く。</p>
第2班	<b>類書文化研究―『藝文類聚』を中心にして―</b>
	期間 2020 ～ 2022 年度 (研究期間中)
	<p>メンバー (10 名) 團田中 良明〔主任〕 団小塚 由博、高橋 睦美、宮瀧 交二、藏中 しのぶ 団芦川 敏彦、小林 敏男、中林 史朗、成田 守、浜口 俊裕</p> <p>概要 本邦に伝来する最古の現存類書の『藝文類聚』は、我が国の古典文学に多大の影響を与えていることは周知の事実である。それが今日に至るまで雑家の書として等閑視されてきた嫌いがある。それ故、未読解の本書を訓読して、原典との校勘、典拠の解明、索引の作成をすることは、単に国文学への影響のみならず、類書学上においても大いに貢献するものだと考える。その研究成果を逐年刊行して今日に及んでおり、斯学の評価を得ている。なお、近年の研究活動の実態に即し、2020 年度以降は、研究課題を「日中文学の比較文学的研究」より「類書文化研究」に改めている。</p>
第3班	<b>アジア史のための欧文史料の研究</b>
	期間 2020 ～ 2022 年度 (研究期間中)
	<p>メンバー (5 名) 団滝口 明子〔主任〕、A.R. ウルック (新) 団出田 恵史、山田 準、齋藤 俊輔</p> <p>概要 本研究の目的は、アジアに関わるヨーロッパ人による旅行記や地理書、年代記などの研究を通じて、アジア史において欧文史料を再評価するとともに、アジア史の進展に貢献することにある。</p> <p>近年まで、アジア史における欧文史料の位置づけは、ヨーロッパ中心史観の見直しが進む中で現地語史料に準ずるものとする傾向が強まった。しかし、最近では、アジアの現地語史料による研究が進んできたことで欧文史料の重要性が見直されている。実際のところ、欧文史料、とくに大航海時代以降について、年代記だけでなく、植民地文書、そして宣教師の書簡などが多く残り、アジア史研究にとって非常に重要であることはかわりない。また、ヨーロッパ中心史観としてアジア史に関連する欧語史料を排除することは研究の進展を妨げかねない。</p> <p>本研究は、こうした現況をふまえ、アジア史に関連する欧文史料の研究を進める。具体的には、1) アジア史研究に有用と思われるヨーロッパ人による旅行記や地理書などに訳注をほどこし、出版することを目指すとともに、2) 当該史料の周辺を複数の同時代史料で補い、研究を深める。</p> <p>なお、本研究の観点は、アジア史のみならず、近年盛んになっている「グローバルヒストリー」のような世界史研究に貢献するものとする。グローバルヒストリーは、世界各地の比較や連動性を重視している。本研究で取り上げる史料群は、アジアやアフリカ、アメリカでの交渉を含むものであり、その研究は世界史研究の進展にも十分資すると考えられる。</p>
第4班	<b>唐・李鳳の『天文要録』の研究 (訳注作業を中心として)</b>
	期間 2022 ～ 2024 年度 (継続)
	<p>メンバー (11 名) 團小林 春樹〔主任〕、田中 良明 団小坂 真二、小林 龍彦、高橋 あやの、中村 聡、中村 士、濱 久雄、細井 浩志、山下 克明、渡邊 義浩</p> <p>概要 前田尊経閣文庫に現存する逸存書である『天文要録』(唐・李鳳撰)の訓読、訳注作業をおこない『『天文要録』の考察[四]、[五]』としての公刊を期す。</p>
第5班	<b>茶の湯と座の文芸</b>
	期間 2020 ～ 2022 年度 (研究期間中)
	<p>メンバー (15 名) 団藏中 しのぶ〔主任〕 団相田 満、安保 博史、王 宝平、オレグ・プリミアニ、菅野 友巳、藏田 明子、笹生 美貴子、高木 ゆみ子、布村 浩一、フレデリック・ジラルール、松本 公一、三田 明弘、矢ヶ崎 善太郎、佐藤 信一 (新)</p> <p>概要 2004 (H16) ～ 2006 (H18) 年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C) (2)「茶の湯と座の文芸の本質の研究―『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果、および 2008 (H20) ～ 2019 (R1) 年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 卷一注釈』～『茶譜 卷十一 (下) 注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間成立とされる茶道百科事典『茶譜』全十八巻の注釈研究を継続しておこなう。</p> <p>研究分担者は、科研費研究から継続して参加する藏中しのぶ (日本文学・上代中古文学)、相田満 (人情報学・中古中世文学) に加えて、安保博史 (日本文学・近世文学)、矢ヶ崎善太郎 (建築史・茶室建築)、三田明弘 (日本文学・中世文学)、パリから高木ゆみ子 (歴史学・茶道史)、フレデリック・ジラルール (仏教思想史、中国から王宝平 (日本文学)、また、新たに兼任研究員として、松本公一 (歴史学・日本文化史学)、オレグ・プリミアニ (日本文学・日本語文化学)、藏田明子 (国際政治学)、菅野友巳 (芸術学)、笹生美貴子 (日本文学・中古文学)、布村浩一 (日本文学・中古文学)、佐藤信一 (日本文学・日中比較文学・中古文学) を迎え、茶道文献を対象とした学際研究をめざす。</p>

第6班	西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 ―イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境―
	期間 2021～2023年度（研究期間中）
	メンバー（16名） 団吉村 武典〔主任〕 團栗山 保之 団アブドリ・ケイワン、石井 啓一郎、藏田 明子、斎藤 正道、鈴木 珠里、ソレマニエ 貴実也、中村 菜穂、南里 浩子、林 裕、原 隆一、深見 和子、吉田 雄介、遠藤 仁（新）、西川 優花（新）
第7班	概要 西アジア地域は、イラン文化圏、アラブ文化圏、中央アジア・トルコ文化圏にまたがる広大な地域において、相互に交流しながら独自の社会、文化を構築、発展し続けてきた。例えば、アフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンなどを含むイラン文化圏では、ペルシア語系の言語や太陽暦の春分を新年（ノウルーズ）として祝う生活文化があげられる。これらは周辺のアラブ、中央アジア、トルコ、インドなどの文化圏との歴史的な交流から生まれたものだが、同時にそれら周辺の文化圏を持つイスラームや遊牧民がもたらした文化や生活習慣もイラン文化圏に影響を与えつづけて来た。
	本研究では、イラン文化圏を基礎とした社会文化の変容に関する研究を発展的に継承し、西アジア地域全体へと視野を拡大する。特に農業や灌漑技術の開発・拡散・需要、生活様式や用具の生産、流通、消費といったモノと、それらを利用する人々の技術（知恵）、思想、文学、歴史など知的生産物の双方を通して、西アジア地域の環境、社会、文化が持つ地脈を考察する。
	第3期まで当研究室が行ってきた、先人の研究成果やその手法の総括を継続し、研究参加者による新たな研究視点や手法を確立していき、研究成果の公表を積極的に行っていく。
第8班	岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」
	期間 2022～2024年度（継続）
	メンバー（8名） 団田辺 清〔主任〕、宮瀧 交二 団池田 久代、岡倉 登志、岡本 佳子、佐藤 志乃、篠永 宣孝、依田 徹
第9班	概要 岡倉天心（1863-1913）は、幼時より漢籍そしてヘボン塾で英語を学び、東京開成学校に入学、1877年東京大学で政治学、理財学ならびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を旨とした。86年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、90年校長に就任した。
	この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、帝室技芸員選抜委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、98年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を旨として美術運動をおこした。1904年（明治37）大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、05年同館の東洋部長となり、06年ニューヨークで『茶の本』を出版、その年の末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、07年文部省美術審査委員会委員となり、08年国画玉成会を結成、10年東京帝国大学で「泰東巧芸史」を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて12年インド、ヨーロッパを経て渡米し、13年（大正2）病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』（1903）、『日本の覚醒（かくせい）』（1904）、『茶の本』（1906）などは外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。
	岡倉天心研究はまだまだ研究されなければならない点があるが、本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めていきたい。
第10班	南アジア社会における包摂と排除
	期間 2021～2023年度（研究期間中）
	メンバー（11名） 団須田 敏彦〔主任〕、J・アバイ、井上 貴子、鈴木 真弥 団石坂 晋哉、篠田 隆、石田 英明、片岡 弘次、舟橋 健太、増木 優衣、ムハマド・ズベル
第9班	概要 多言語多民族国家により構成されている南アジアでは、近年の政治経済社会変動のなかで、社会を構成する多様な集団間の統合とアイデンティティをめぐる関係も変化し、その結果、基本的人権や国民が平等に享受すべき諸種の権利から「排除」(Exclusion)される個人や集団が生じている。他方、この排除の現実を踏まえたうえで、多様な集団間の統合とアイデンティティの強化、すなわち「包摂」(Inclusion)を求める政治経済社会運動も展開している。
	本研究では、多様な民族、宗教、カースト、階級構成をもつ南アジア社会で周辺に置付けられてきた集団を対象として、彼らと社会変動との関わりを「包摂」と「排除」の観点から分析する。彼らはどのような文学、政治、社会運動をとおして、自らの行動規範や価値観を再構成し新たなアイデンティティを模索し「包摂」を求めてきたのか、彼らに対してどのような「排除」の仕組みや圧力が働いてきたのかを、社会学や経済学を専門とする委員と歴史学、文学を専門とする委員の共同作業をとおして、総合的に研究する。
	明清の文言小説と文人たち―張潮『虞初新志』訳注―
第10班	期間 2023年度より再活動の予定
	メンバー（5名） 団小塚 山博〔主任〕 團田中 良明 団荒井 礼、今井 秀和、小川 陽一
	概要 再活動準備中
第10班	インド洋が取り結ぶ東西交流の諸相に関する研究
	期間 2021～2023年度（研究期間中）
	メンバー（4名） 團栗山 保之〔主任〕 団吉村 武典 団新井 和広、太田 啓子
第10班	概要 インド洋は、東アフリカ、西アジア、南西アジア、南アジア、そして東南アジアといった諸地域に縁どられた大洋である。古来、このインド洋を介して、これらの諸地域に居住する人びとは、ひんばんに交流していた。このような、インド洋を往来していた人びと、あるいは人びとが携え流通していたさまざまなモノ、または人やモノが動くことによって伝わる情報・技術・文化などの諸相について考察することが、本研究の目的とするところである。
	本研究でインド洋を中心に取り上げる理由は、近年、中国がインド洋への進出を活発化させ、米国をはじめとする欧米諸国やアジア・アフリカ諸国はその対応に迫られており、いわばインド洋を舞台とした世界情勢の変容が観察されるようになってきているからである。この意味において、インド洋を中心とした東西交流の検証は、歴史的な事柄を考察すると同時に、すぐれて現代的な議論でもあると言えるのである。
	本研究で考察する東西交流とは、インド洋を舞台として、同海洋の東西に位置するヨーロッパやアフリカ、そしてアジアの間で展開していた、人・モノ・情報の往来・流通・伝播と、それらに関連・由来する諸事象を意味している。こうした交流の問題は、非常に多種多様な歴史的な事象を包含していると考えられる。
具体的には、イスラームが誕生した西暦7世紀前後からポルトガルをはじめとする西欧列強がインド洋でその勢力を拡大する18世紀ごろまでにおいて、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒、あるいは仏教徒などの商人、職人、学生、旅人、軍人、船乗りといったじつにさまざまな職能を有する人びとが、商業、貿易、軍事、就職、修学、旅行、航海といったいろいろな目的の完遂をもとめて、自らが誕生し生活している社会、地域、あるいは国家から、異なる社会、地域、国家などへと、インド洋をわたって移動、移住、定着、帰還し、そうした営為が一時的、あるいは継続的に、そして相互的、または重層的に展開していたことを考察したいと考えている。	

## 2021 年度 東洋研究所共同研究班活動報告

第1班	中華人民共和国 100 年史研究 ― 日中関係の今後を見据えて			
	研究班の活動			
	研究会	新型コロナ感染の拡大により、対面での研究班研究会はしていない		
	調査	新型コロナ感染の拡大により、調査活動はしていない		
	No.	研究成果物（論文）		
1	柴田善雅 タイトル 「管理通貨制移行後の樺太石炭会社の事業拡張と衰退」 出版社等 『東洋研究』第 221 号 発行年月 2021 年 11 月 25 日			
2	岡崎邦彦 タイトル 「21 世紀初頭の日中関係」 出版社等 『東洋研究』第 222 号 発行年月 2021 年 12 月 25 日			
3	篠永宜孝 タイトル 「ロシア革命前のロシア資本主義発展における古儀式派資本家の役割」 出版社等 『東洋研究』第 222 号 発行年月 2021 年 12 月 25 日			
4	高田茂臣 タイトル 「コラム 呉鎮守府の東郷平八郎」 出版社等 『経済研究』（大東文化大学）第 35 号 発行年月 2022 年 3 月			
第2班	類書文化研究 ― 『藝文類聚』を中心にして―			
	研究班の活動			
	No.	開催日時	開催場所	参加人数
	1	4 月 17 日	オンライン	7 名
	2	5 月 22 日	オンライン	7 名
	3	6 月 26 日	オンライン	6 名
	4	7 月 24 日	オンライン	5 名
	5	9 月 18 日	オンライン	7 名
	6	10 月 16 日	オンライン	7 名
	7	11 月 27 日	オンライン	6 名
	8	12 月 18 日	オンライン	7 名
	9	1 月 29 日	オンライン	8 名
	10	2 月 26 日	オンライン	7 名
11	3 月 26 日	オンライン	7 名	
No.	研究成果物（刊行物等）			
1	『藝文類聚（巻五十）訓讀付索引』（2022 年 2 月 25 日発行）			
第3班	アジア史のための欧文史料の研究			
	2021 年度活動休止			
第4班	唐・李鳳撰の『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）			
	研究班の活動＝新型コロナ感染症蔓延のため、集合しての研究会は実施せず。			
	所属研究員の活動			
	No.	刊行物等準備		
	1	昨今の現状により、対面方式の研究会にかえて、来年度（2022 年度）刊行予定の「『天文要録』の考察 [四]」の原稿の完成原稿の作成を、第一に、小林が作成した「たたき台としての原稿をもとに、第二に、田中が準完成原稿化し、第三に、それを、班研究員全員に送付したうえで再々検討し、各自が気づいた箇所の加筆、訂正、を施して真の完成原稿の作成作業を継続中である		
No.	研究成果物（刊行物等）			
1	『中国古代史研究―天文・暦学を中心として―』（2022 年 2 月 25 日発行）			

茶の湯と座の文芸				
研究班の活動				
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
1	4月11日	zoom 研究会	18名	『茶譜』十三0「茶譜目録」、1「晨茶湯事 附路地行灯板灯籠」（藏中）
2	4月25日	zoom 研究会	11名	『茶譜』卷十三1「晨茶湯事 附路地行灯板灯籠」（笹生）
3	5月9日	zoom 研究会	19名	『茶譜』卷十三2「夜茶湯事 附短檠行燈木燈台手燭」（菅野）
4	5月22日	zoom 研究会	16名	『茶譜』卷十三2「夜茶湯事 附短檠行燈木燈台手燭」（菅野）
5	6月6日	zoom 研究会	16名	『茶譜』卷十三2「晨茶湯事 附路地行灯板灯籠」（菅野）、『茶譜』卷十三3「宗和短檠之図」（布村）
6	6月20日	zoom 研究会	28名	講演：「中世茶の湯の芸術論についての考察」（松本）、『茶譜』卷十三3「宗和短檠之図」（布村）
7	7月4日	zoom 研究会	23名	講演：「『茶譜』の語彙と近世俳諧—『しほからし』に注目して—」（安保）、『茶譜』卷十三3「宗和短檠之図」（松本）
8	7月8日	zoom 研究会	20名	講演：「茶の湯の賛と肖像—『茶譜』巻四「墨蹟写」の特質—」（藏中）、『茶譜』卷十三3「宗和短檠之図」（布村）
9	8月16日	zoom 研究会	17名	講演：「もう一つの『茶譜』—明・朱権『茶譜』を読む」（三田）、『茶譜』卷十三3「宗和短檠之図」（布村）
10	8月17日	zoom 研究会	18名	『茶譜』卷十三4「菓子不時跡見茶湯事」（北井）
11	8月23日	zoom 研究会	19名	講演：「『茶譜』における茶の湯と香—炭手前を中心に—」（高木）、『茶譜』卷十三4「菓子不時跡見茶湯事」（オレグ）
12	8月30日	zoom 研究会	16名	『茶譜』卷十三4「菓子不時跡見茶湯事」（オレグ）
13	9月19日	zoom 研究会	14名	『茶譜』卷十三5「教寄屋間香爐置合」（高木）
14	10月17日	zoom 研究会	16名	『茶譜』十三6「釣香炉之事」（菅野）、『茶譜』十三7「小棚間香爐置合 附香聞様事」（松本）
15	11月21日	zoom 研究会	14名	『茶譜』卷十三7「小棚間香爐置合 附香聞様事」（松本）、『茶譜』卷十三9「書院卓香爐事 附香炉之図」（高木）
16	12月26日	zoom 研究会	17名	『茶譜』卷十三9「書院卓香爐事 附香炉之図」（笹生）、『茶譜』卷十三10「小棚間香爐置合 附香聞様事」（菅野）
17	1月30日	zoom 研究会	15名	『茶譜』卷十三9「書院卓香爐事 附香炉之図」（高木）、『茶譜』卷十三10「小棚間香爐置合 附香聞様事」（菅野）
18	2月20日	zoom 研究会	21名	『茶譜』卷十三10「塩器香爐之図」（オレグ）、『茶譜』卷十三11「伽羅手入事」（菅野）
所属研究員の活動				
No.	刊行物等			
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『東洋研究』第226号に、第五班「茶の湯と座の文芸」の特集として『『茶譜』と茶の湯・香と座の文芸』を刊行した。執筆者は、藏中しのぶ、安保博史、高木ゆみ子、松本公一である。</li> <li>・『水門一言葉と歴史—』第30号の小特集「伝・賛と肖像の文学史」に、藏中しのぶ、フレデリック・ジラルール、三田明弘、安保博史、高木ゆみ子、オレグ・プリミアニ、相田満が執筆した。</li> <li>・新型コロナウイルス感染症の影響により、『茶譜』卷十三の注釈はZoomによる研究会を開催し、原稿はメールによって共有し、確認・点検をおこなっている。3月には卷十三を読了し、新年度4月から卷十四にはいる予定である。</li> </ul>			
西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 —イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—				
研究班の活動				
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
1	5月29日	オンライン開催 (zoom) (14:00～17:00)	11名	第1回 大東 西アジア研究会 報告：斎藤正道「イスラーム的」を巡るイラン国内の言説
2	7月31日	オンライン開催 (zoom) (14:00～17:00)	32名	第2回 大東 西アジア研究会 報告：ケイワン・アブドリ「『革命の第二步』への一段階としての2021年イラン大統領選挙について」 コメント：貫井万里（文京学院大学）
3	9月25日	オンライン開催 (zoom) (14:00～17:20)	25名	第3回 大東 西アジア研究会 報告1：藏田明子「『和平合意』とターリバーンの復権」 報告2：林裕「アフガニスタンの政権交代から考える地方農村部」 報告3：鈴木珠里「文字から映像への越境—フォルグ・ファッロフザード映画再考『あの家は黒い』を中心に—」
4	12月5日	オンライン開催 (zoom) (13:00～18:00)	20名	第4回 大東 西アジア研究会 総合テーマ：「イラン・アフガニスタンのフィールド調査研究のこれまでと今後の展望」 総合司会：原隆一 報告1：ソレマニエ貴実也「カーシャーン旧市街の伝統的住宅と街区—現地調査の報告と今後の目標—」 報告2：吉田雄介「織物から見るヤズド州メイボド地域の20年間の地域の変容」 報告3：西川優花「国勢調査・ライフヒストリーからみるエスファハン州ヴァルザネの変容」 報告4：林裕「アフガニスタンの20年：カーブル州北方郡部におけるフィールドワークの視角から」 報告5：遠藤仁「アフガニスタン農村の半世紀の変容—大野盛雄1970年調査のカナート模型分析から」

第6班	5	3月6日	オンライン開催 (zoom) (14:00 ~ 18:30)	22名	第5回 大東 アジア研究会 報告1: 深見和子「所謂、染料「ベルシャン・ベリ」の用語の越境—ベルシア絨緞の「預言者の緑」について—」 報告2: 石井啓一郎「水路をめぐるファルハードの勲功伝説と現代文学のなかの主題的塑形」
	No.	研究成果物 (刊行物等)			
	1	・原隆一、南里浩子編『大野盛雄 フィールドワークの軌跡Ⅲ』大東文化大学東洋研究所 (2022年2月25日発行)			
	所属研究員の活動				
	No.	学会等での発表			
	1	・2021年12月11日、オンライン開催、吉村武典「疫病とマムルーク朝期エジプト社会」(地中海学会第45回大会地中海トーキング)			
	No.	刊行物等			
	1	・林裕、第8章「対アフガニスタン援助：命の重さと「援助の在り方」」 阪本公美子ほか編『日本の国際協力 中東・アフリカ編：貧困と紛争にどう向き合うか』ミネルヴァ書房、2021年8月、65-73頁			
	2	・熊倉和歌子、吉村武典、亀谷学、手島秀典、久保亮輔「マムルーク朝前期・軍務庁書記官のための書記術指南：スワイリーの『学芸の究極の目的』「ディーワーンの書記術と財務のペン」(第2学芸・第5部・第14章)日本語訳注」『アジア・アフリカ言語文化研究』102 (2021年9月)、115-155頁			
	3	・石井啓一郎『タランタ・バブへの手紙：ナズム・ヒクメット詩選』(アジアの現代文芸、Turkey (トルコ) 3)、大同生命国際文化基金、2022年2月			
第7班	岡倉天心(覚三) についての「伝統と近代」				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
	1	7月17日 ・24日 ・31日	大東文化会館	15名程度	「明治後半期における日本美術界と岡倉天心」(東洋研究所夏休み公開講座) ・岡倉登志 (7月17日) / 佐藤志乃 (7月24日) / 田辺清 (7月31日) ・岡倉天心をめぐる日本の美術界の動向について明治後半期を中心とした様々な様相を考察。
	2	9月4日	Zoom開催	48名	依田徹 「大聖寺藩主前田利邇の茶」(茶の湯文化学会)
	3	12月19日	国登録文化財・睡足軒	13名	岡倉登志 「岡倉天心と渋沢栄一」(鵬の会・東洋研究所岡倉天心研究班共催) 1902年の船旅に始まる天心と渋沢との交流について紹介。
	No.	刊行物等			
	1	・伊礼禮次朗、熊倉功夫、近藤誠一、大林剛郎、デービッド・アトキンソン、保科宗真、田野倉徹也、依田徹 (司会)「ディスカッション ポストコロナ時代の茶の湯とは? (大特集 茶のあるくらしのサステナブル)」『なごみ』42(8)、7月28日			
	2	・篠永宣孝「ロシア革命期のロシア資本主義発展における古儀式派資本家の役割」(『東洋研究』第222号、2021年12月、大東文化大学東洋研究所)			
	第8班	南アジアにおける包摂と排除			
研究班の活動					
No.		開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
1		7月14日	オンライン (zoom使用) 15時~17時	7名	井上貴子「東京在住インド人コミュニティの親密圏—家族形成・学校教育・文化活動めぐって—」 篠田 隆「インドにおける食習慣の動向分析—グジャラート州の事例を中心に—」 須田敏彦「南アジアに関する大東文化大学の取り組み」
所属研究員の活動					
No.		刊行物等			
1		・石田英明「マラーティー語」、『世界の公用語事典』庄司博史編、丸善出版、2022年1月、p.108-111			
2		・篠田隆「インド・グジャラート州における都市若者の内食状況：アーマダバード市女子公立職業教育学校学生の事例研究」『東洋研究』第220号、2021年7月、29-59頁。			
3		・井上貴子「東京在住ニューカマーインド人のコミュニティ形成—「共棲」の視点から考える親密圏の活動—」『歴史と経済』第253号、2021.10、1-18頁、政治経済学・経済史学会			
4		・Takako Inoue "Indigenisation of Traditional Performing Arts in Japan: Transformation of Indian Elements in Gagaku," in Sushila Narsimhan ed. India-Japan Narratives: Lesser Known Historical & Cultural Interactions. Mombusho Scholars Association of India, 2021, pp.55-79.			
5	・Shinya Ishizaka, "Glocalization of Natural Farming and Nationalism", 26th IPSA World Congress of Political Science, International Political Science Association, Online (Lisbon), July 14, 2021				
6	・舟橋健太「被差別/非差別の主張とカースト制度—「不可触民」であること、インド人であること—」上村静・菊田真司・川村覚文・関口寛・寺戸淳子・山本昭宏(編著)『差別の構造と国民国家—宗教と差別』				
7	・SUZUKI, Maya. "Diluted Dalit Rights and Justice in the Post-Mandal Era," the 26th European Conference on South Asian Studies (ECSAS2021), Vienna, Austria, July 28, 2021.				
8	・増木優衣「インドにおける清掃人カーストへの社会的差別をめぐる NGO スラブの認識—ニューデリーの「トイレ博物館」の事例から—」『東洋研究』220号、pp. 1-28, 2021年				
9	・須田敏彦「バングラデシュ経済の軌跡と課題—貧困と停滞の国家から成長国家への転換—」『大東文化大学紀要』第60号<社会科学>、pp.295-312, 2022年2月。				

明清の文言小説と文人たち 一 張潮『虞初新志』 訳注一					
第9班	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	研究会 (テーマ・内容・発表者)	
	1	4月24日	zoomによる オンライン研究会	5名	『虞初新志』 卷三「一瓢子伝」の訓読・翻訳の検討 (荒井)
	2	5月30日	zoomによる オンライン研究会	5名	『虞初新志』 卷三「宋連璧伝」の訓読・翻訳の検討 (田中)
	3	6月27日	zoomによる オンライン研究会	4名	入稿に向けた『虞初新志』 序文等・巻一の総合的な検討 (各担当者)
	4	7月25日	zoomによる オンライン研究会	4名	入稿に向けた『虞初新志』 巻二の総合的な検討 (各担当者)
	5	8月24日	zoomによる オンライン研究会	4名	入稿に向けた『虞初新志』 巻三の総合的な検討 (各担当者)
	6	9月26日	zoomによる オンライン研究会	4名	入稿に向けた『虞初新志』 全体 (解説・余説) の検討 (各担当者)
7	11月6日	zoomによる オンライン研究会	4名	入稿に向けた『虞初新志』 全体の検討 (全員)	
所属研究員の活動					
No.	研究成果物 (出版物)				
1	大東文化大学東洋研究所編/小川陽一監修/小塚由博編集/荒井礼・今井秀和・小川陽一・小塚由博・田中良明共著『『虞初新志』 訳注 巻一～巻三』 (2022年2月)				
第10班	インド洋が取り結ぶ東西交流の諸相に関する研究				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	研究会 (テーマ・内容・発表者)	
	1	5月28日	オンライン開催	4名	栗山保之: インド洋西海域におけるクウェイト船の航海
	2	8月27日	オンライン開催	4名	新井和広: 20世紀中頃の東アフリカにおけるアラブの状況: 英国の「移送文書 Migrated Archives」を用いた研究の可能性
	3	12月3日	オンライン開催	5名	太田啓子: マリア・テレジア銀貨と紅海貿易
	4	3月18日	オンライン開催	5名	吉村武典: マムルーク朝時代の徴税と会計年度の調整「タフウィール」: 「年と月を繰りあげること (タフウィール) についての満月の上昇」写本をめぐって
	所属研究員の活動				
No.	研究成果物 (いずれも論文)				
1	・栗山保之「ポルトガル来航期のインド洋におけるアラブの船乗りたちの風」『東洋研究』大東文化大学東洋研究所、221号、(71)-(92)頁 2021/11				
2	・栗山保之「インド洋におけるアラブの船乗りたちの航海技術」『白山史学』、白山史学会、58号、1-20頁 2022/03				
3	新井和広「1940-50年代における東アフリカのアラブ: 「移送文書群」の「発見」と今後の研究の可能性」『東洋研究』大東文化大学東洋研究所、221号、(93)-(119)頁 2021/11				

東洋研究所国際交流講演会開催一覧

	開催日	曜日	時間	テーマ	講師	講師身分
1	1983.06.22	水		ベトナム社会主義共和国における歴史研究について	ヴァン・タオ	ベトナム社会主義共和国社会科学委員会史学院院長
2	1984.07.05	木		古代中国における親族構造と国家構造	レオン・ヴァンデルメルシュ	日仏会館フランス学長、フランス国立高等研究院教授
3	1985.10.30	水	14:00～	現代国際関係研究所の機構と研究の現状	奚志豪	現代国際関係研究所助理研究員（講師）
4	1985.10.30	水	14:00～	中日関係の現状と日本に対する見方・期待	劉江永	現代国際関係研究所助理研究員（講師）
5	1986.04.25	金	17:00～	インド文明と民主主義	ラジニ・コタリ	The Centre for the Study of Developing Societies 教授 インド政治学者
6	1986.07.09	水		中国の対朝鮮半島政策	陶炳蔚	中国国際問題研究所アジア太平洋室主任
7	1987.07.06	月	14:00～	今日のバキスタン	アスラーム・シャー	カラチ大学社会科学問題学科学長、準教授
8	1987.11.25	水	15:00～	内蒙古の少数民族の生活と文化	巴達榮暖（バタランガ）	中華人民共和国内蒙古自治区社会科学院顧問
9	1989.07.10	月	15:00～	インドから見たアジア太平洋時代	V. D. チョブラ	アジア太平洋国際研究所〔インド・ニューデリー〕副 所長、教授
10	1989.10.12	木		近代日本における華僑社会の形成	陳昌福	上海師範大学歴史系副教授
11	1990.10.23	火	17:30～	アジア・太平洋地域の新しい枠組みについて	陳啓懋	中国上海国際問題研究所所長、上海国際学会会長
12	1992.07.07	火		近代経学と政治	湯志鈞	上海社会科学院歴史研究所所長
13	1992.12.08	火		災害管理—1990 年イラン地震後における社会経済問題	メフディ・ターレブ	
14	1993.10.14	木	13:00～	中国人の「忍」—内容・方式・限度	馬宏偉	内蒙古師範大学〔中国〕、東洋研究所客員研究員
15	1994.02.18	金	15:00～	台湾の現状と将来の展望	洪樵榕	二松学舎大学教授
16	1994.10.31	月		中国における人口の変動からみた少数民族問題	胡起望	中央民族大学〔中国〕民族研究所教授
17	1995.02.04	土	16:00～	韓国仏教の現状	金知見	韓国精神文化研究院 文学博士
18	1995.10.26	木	15:00～	中国の簡体字について	張明輝	二松学舎大学教授
19	1996.02.24	土		ヒンドゥー彫刻における母なる女神	シリル・バリヤト	上智大学助教授
20	1996.06.15	土	15:00～	タイ仏教の歴史と現状	ターナヴット・ビック	ダンマカーヤ寺比丘
21	1997.02.22	土	15:00～	アメリカと日本の百年	ウィリアム・スティール	国際基督教大学教授
22	1997.12.04	木	14:00～	日本からオランダに渡った 1188 枚の写真コレクション について	ヘルマン・J・ムースハルト	オランダ国立ライデン大学
23	1998.02.21	土	15:00～	21 世紀における台日文化交流について	何瑞藤	国立台湾大学教授
24	1998.12.10	木	15:00～	韓国宗教界の現状と問題点	金漢益（キムハンイク）	東方学院講師・東京大学東洋文化研究所協力研究員
25	1999.02.20	土	15:00～	中国に関して何を問うべきか	クルト・W・ラドケ	早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授
26	1999.06.26	土	15:00～	19 世紀初頭の日本人の生活と文化	ムーヌッディーン・アキール	東京外国語大学客員教授
27	2000.02.19	土	15:00～	科挙制度と現代中国教育の問題点	叢小榕	大東文化大学国際関係学部講師
28	2000.12.07	木	16:00～	16 世紀末期～20 世紀初頭日中両国における西洋文化 導入の比較—科学技術文献を中心とする—	李素楨	東海大学外国語教育センター中国語講師 成城大学日中文化比較非常勤講師
29	2001.02.17	土	15:00～	ドイツ人の目で見えた日本の社会運動とその政治的役割	ヴィリアム・フォッセ	国際基督教大学教養学部社会科学科助教授
30	2001.12.06	木	14:30～	最近のオランダの人口動態について	アントン・フェルコフ	日蘭学会講師
31	2002.02.23	土	15:00～	私の日本美術史研究	リチャード・ウィルソン	国際基督教大学教養学部人文科学科教授
32	2002.06.22	土	15:00～	敦煌漢文仏教文献の価値について	李徳龍	中央民族大学〔中国〕教授 図書館長
33	2003.02.22	土	15:00～	私の日本研究—戦後民主主義の源流	M. ウィリアム・スティール	国際基督教大学教養学部社会科学科教授
34	2003.06.21	土	15:00～	明治前期における中国人が作成した日本地図 —『日本環海險要図誌』を中心に—	王宝平	浙江大学日本文化研究所教授、現二松学舎大学大学院 特任教授
35	2004.02.21	土	15:00～	紅に映る涙—王朝文学の詩的言語—	クリステフ・ツベタナ イリイフ	国際基督教大学教養学部教授
36	2004.06.19	土	15:00～	伊勢物語の視覚的享受史	ジョシュア・S. モストウ	ブリティッシュ・コロンビア大学〔カナダ〕アジア研 究科教授
37	2005.02.19	土	15:00～	中国における対日世論と感情の動向	石 平	(有) PPC 研究所 取締役
38	2005.06.18	土	15:00～	清代の秀女選抜制度について	趙令志	中央民族大学〔北京〕歴史系副教授 歴史学博士
39	2006.02.18	土	15:00～	日本近代小説の—ジャンルとしての私小説	トウンマン・典子	スウェーデン・ヨーテボリ大学アジア・アフリカ語学 科日本語科教授
40	2006.06.17	土	15:00～	風揚げについて	マズハル・イクバル・ダーニシ	大東文化大学国際関係学部国際文化学科非常勤講師
41	2007.02.17	土	15:00～	通訳教育から考えた日中両国間の文化的違いについて	劉麗華	吉林大学〔中国〕外国語学院教授
42	2008.02.16	土	15:00～	オランダ商館長日記に見る日蘭関係	イサベル・ファン・ダーレン	財団法人日蘭学会 渉外・学芸担当
43	2009.02.21	土	15:00～	東アジアの将来像：共同体か異体か	ウェーブ・ジェイスン	東京大学東洋文化研究所准教授
44	2010.02.20	土	15:00～	通訳者としてのプロ意識の生む通訳者の存在価値とは —中・日通訳トレーナーの視点から—	張宇澄	大連外国語学院日本語学院〔中国〕専任講師
45	2011.02.19	土	15:00～	東西の古典における「見る」ことの呪性と恋愛 —神話的原型より文学的トポスへ—	ルカ・カッポンチェッリ	カタニア大学〔イタリア〕外国語外国文学学部講師
46	2012.02.18	土	15:00～	韓国の先祖供養	釋 悟震	東方学院講師 東方研究会研究員
47	2013.02.16	土	15:00～	与謝野晶子と私	ジャンーン・バイチマン	本学英米文学科教授
48	2014.02.15	土	15:00～	東京裁判：歴史の犯罪化	エリオット・ミルトン	駐日アイルランド大使館二等書記官
49	2015.02.28	土	15:00～	カール・ハウスホーファーの地政学理論と日本の「大東 亜共栄圏」構想	クリスティアン・W. シュバング	本学外国語学部准教授
50	2016.02.20	土	10:30～	激動の中東とイランの変革 ：イランは「フツウ」の国になれるか	アブドリ・ケイワン	神奈川大学 アジア研究センター研究員
51	2017.02.18	土	10:00～	朝鮮未子学の特徴～心に対する研究～	金 光来	東京大学大学院 人文社会系研究科助教
52	2018.02.17	土	10:00～	江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額 —群馬県世良田東照宮本の伝来と系統—	オレグ・プリミアーニ	大東文化大学 外国語学部日本語学科非常勤講師
53	2019.02.23	土	10:00～	ハラールと日本におけるハラール事情	ムハマド・ズベル	大東文化大学 国際関係学部国際文化非常勤講師
54	2020.02.22	土	10:00～	宗教儀礼に見る仙薬としての茶 —「称名寺聖教」を中心に—	張 名揚	実践女子大学 文芸資料研究所 客員研究員
55				新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点より、開催中止。		
56				新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点より、開催中止。		



## ■名簿

## 管理委員会委員 (8名)

- 1 岡崎 邦彦
- 2 栗山 保之
- 3 小林 春樹
- 4 田中 良明
- 5 小塚 由博
- 6 宮瀧 交二
- 7 田辺 清
- 8 吉村 武典

## 専任研究員 (4名)

- 1 岡崎 邦彦 (所長)
- 2 栗山 保之
- 3 小林 春樹
- 4 田中 良明

## 事務室 (2名)

- 1 金山 弘通
- 2 宮本 恵

## 兼任研究員 (15名)

- 1 小塚 由博
- 2 高橋 睦美
- 3 宮瀧 交二
- 4 J アバイ
- 5 藏中 しのぶ
- 6 齊藤 哲郎
- 7 須田 敏彦
- 8 滝口 明子
- 9 アンドリュー・リチャードウルク
- 10 井上 貴子
- 11 田辺 清
- 12 鹿 錫俊
- 13 鈴木 真弥
- 14 吉村 武典
- 15 高田 茂臣

## 兼任研究員 (72名)

- 1 相田 満
- 2 芦川 敏彦
- 3 アブドリ・ケイワン
- 4 鏡屋 一
- 5 安保 博史
- 6 新井 和広
- 7 荒井 礼
- 8 池田 久代
- 9 石井 啓一郎
- 10 石坂 晋哉
- 11 石田 英明
- 12 出田 恵史
- 13 伊藤 一彦
- 14 今井 秀和
- 15 上野 英詞
- 16 植松 希久磨
- 17 江崎 隆哉
- 18 遠藤 仁
- 19 太田 啓子
- 20 王 宝平
- 21 岡倉 登志
- 22 岡本 佳子
- 23 小川 陽一
- 24 オレグ・プリミアニ
- 25 片岡 弘次
- 26 菅野 友巳
- 27 藏田 明子
- 28 小坂 眞二
- 29 小林 龍彦
- 30 小林 敏男
- 31 齋藤 俊輔
- 32 斎藤 正道
- 33 笹生 美貴子
- 34 佐藤 志乃
- 35 佐藤 信一
- 36 篠永 宣孝
- 37 篠田 隆
- 38 柴田 善雅
- 39 嶋 亜弥子
- 40 鈴木 珠里
- 41 ソレマニエ 貴実也
- 42 高木 ゆみ子
- 43 高橋 あやの
- 44 田中 寛
- 45 中林 史朗
- 46 中村 聡
- 47 中村 士
- 48 中村 菜穂
- 49 成田 守
- 50 南里 浩子
- 51 西川 優花
- 52 布村 浩一
- 53 濱 久雄
- 54 浜口 俊裕
- 55 林 裕
- 56 原 隆一
- 57 深見 和子
- 58 福田 和展
- 59 舟橋 健太
- 60 フレデリック・ジラル
- 61 細井 浩志
- 62 増木 優衣
- 63 松本 公一
- 64 三田 明弘
- 65 ムハマド・ズベル
- 66 矢ヶ崎 善太郎
- 67 山下 克明
- 68 山田 準
- 69 由川 稔
- 70 吉田 雄介
- 71 依田 徹
- 72 渡邊 義浩

『藝文類聚』(巻50) 訓讀付索引

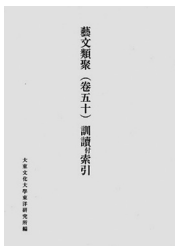
大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 (代表 田中良明)

令和4年2月25日発行／B5判 56, 43頁／ISBN 978-4-904626-44-3／頒価 3,000円 (税別)

「藝文類聚」は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。その『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考慮して重要語彙索引を掲載したものである。

歴史研究者からの要望に伴い、巻45以降職官部の読解に着手している。

本巻には『藝文類聚』巻50職官部6(刺史 尹 太守 令長)の訓読文・校異・注(典拠)・索引を収めている。《既刊》巻1～16、巻45～49、巻80～89



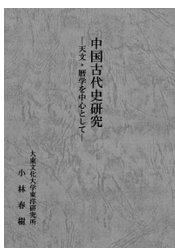
『中国古代史研究—天文・暦学を中心として—』

大東文化大学東洋研究所「唐・李鳳の『天文要録』の研究(訳注作業を中心として)」研究班 (代表 小林春樹)

2022年2月25日発行／A5判 163頁／ISBN 978-4-904626-45-0／頒価 3,000円 (税別)

本書は、『天文・暦学篇』に収めた中国古代の「天文占」や「暦学・暦法」に関する論考を中心とした論文集であり、それら諸論考の主要な関心は、第一に、中国古代の天文、暦学・暦法が「神秘主義的性格」と「合理主義性格」という、一見すると対照的な性格を有している事実、第二には、そのような天文、暦学・暦法が所謂「正統論」において果たした役割の実態とその変遷、の二点に集約される。

したがって本論文集は、上記のような限られた観点からなされた、中国古代の天文、暦学・暦法に関する「管見」というべき性格を有するものであるが、日本における従来の中国古代の天文、暦学・暦法史研究が戦前の新城新蔵以来、戦後の藪内清らにいたるまで、主として理科系、とくに天文学の専門家によって行われてきたという事実を鑑みると、史学を専門とする本書の著者による研究が、いわば当該分野の研究の問題式と方法論にいささか形とも新機軸をもたらすことができるならば幸甚である。



大野盛雄 フィールドワークの軌跡Ⅲ—イラン革命のフィールドワーク 1975～1987年—

2022年2月25日発行／B5判 237頁／ISBN 978-4-904626-46-7／頒価 7,000円 (税別)

大東文化大学東洋研究所「西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容—イラン、アラブ・トルコ文化圏の越境—」の研究班 原 隆一・南里浩子 編

本書は、『大野盛雄フィールドワークの軌跡』シリーズの第Ⅲ巻(4冊目)にあたる刊行物(第Ⅳ巻は既刊2020年2月)で、そのクライマックスは大野氏が現地遭遇した歴史的大事件、「イラン・イスラム革命」の体験の記録にある。大野氏は反体制運動が激しさをます1978年4月からイラン革命時の1979年2月をはさみ、翌年の1980年3月までテヘランにある日本学術振興会西アジア地域研究センターに駐在した。イラン革命に向かって反体制運動がピークを迎えようとしていた頃、イラン駐在の多くの日系企業の社員やその家族は脱出を急いでいた。そんななか、そのテヘランに滞在していたある高名な日本人イスラーム学者もまた、そそくさと帰国の途についてしまった。これを横目で見ていた大野氏は、「地震学者は大地震が起こったらまっさきに現場にかけつけるだろう、歴史学者が人間社会の大変化が起こっているときに現場から逃げてしまってどうするのか」と、つぶやきながら、氏はまもなく動乱の地テヘランに大野夫人を日本から呼び寄せるのであった。その2年間の動乱期の様子はリアルタイムで書かれた手書き日誌に残されており、革命のど真ん中であって、まさに「イラン革命をフィールドワークする」大野氏の記録文書である。



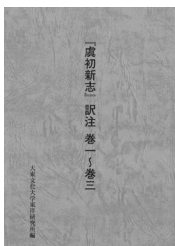
『虞初新志』 訳注 巻一～巻三

第9班(研究課題:明清の文言小説と文人たち—張潮『虞初新志』訳注— 主任:小塚由博)

2022年2月25日発行／A5判 314頁／ISBN 978-4-904626-43-6／頒価 4,000円 (税別)

『虞初新志』は、清初の張潮編の文言小説集で、文人たちの筆記・小説が収められおり、文人たちによく読まれた。日本にも伝わり、和刻本が刊行されている。

その内容は武芸、音楽、演劇、仙術、呪術、工芸、技芸、話芸、妓女等実に多種多様で、当時の文人たちの興味関心の広さを表している。本書はその『虞初新志』に現代語訳・訓読・語釈・余説を施したものであり、利用者の便を考慮して代表的な語句について索引も掲載している。第一冊目となる本書では、時代背景や作者・作品等に関する解説を加えた上で、序文・凡例を含む巻一～巻三の現代語訳・訓読・語釈・余説・索引を収めている。掲載されている作品は魏禧「大鉄椎伝」、林嗣環「秋声詩自序」、周亮工「盛此公伝」、呉偉業「柳敬亭伝」、方亨咸「武風子伝」、尤侗「瑤宮花史小伝」、侯方域「馬伶伝」、張明弼「冒姫董小宛伝」等、各巻6話・計18話である。(底本は和刻本を用いる)



第220号 (2021年7月26日発行)

- 藏 中 しのぶ／『南総里見八犬伝』の「倚福反転」と「正法眼蔵」  
—「無瞳子の画虎」譚と一休宗純・「諸悪莫作、衆善奉行」—
- 中 村 聡／中村敬字のキリスト教理解
- 小 林 春 樹／後漢における歴史書等の編纂と、校書等の学術事業について
- 渡 邊 義 浩／『史通』の經書批判と『論衡』
- 増 木 優 衣／インドにおける清掃人カーストへの社会的差別をめぐるNGOスラブの認識  
—ニューデリーの「トイレ博物館」の事例から—
- 篠 田 隆／インド・グジャラート州における都市若者の内食状況  
—アーメダバード市女子公立職業教育学校学生の事例研究—

第221号 (2021年11月25日発行)

- 布 村 浩 一／詩語のイメージ「ホトトギス」について
- 柴 田 善 雅／管理通貨制移行後の樺太石炭会社の事業拡張と衰退
- 岡 倉 登 志／岡倉天心をめぐる人々—フェノロサ門下の友人たち (2) —嘉納治五郎 (上)
- 栗 山 保 之／ポルトガル来航期のインド洋におけるアラブの船乗りたちの風
- 新 井 和 広／1940-50年代における東アフリカのアラブ：「移送文書群」の「発見」と今後の研究の可能性

第222号 (2021年12月25日発行)

- 小 坂 眞 二／神祇と陰陽道 (三)
- 岡 崎 邦 彦／21世紀初頭の日中関係—2000年～2010年代の日中諸問題
- 篠 永 宣 孝／ロシア革命前のロシア資本主義発展における古儀式派資本家の役割

第223号 (2022年1月25日発行)

- 藏 中 しのぶ／巻頭言—『茶譜』と茶の湯・香と座の文芸
- 安 保 博 史／『茶譜』の語彙と近世俳諧—「しほからし」に注目して
- 高 木 ゆみ子／『茶譜』における「香」関連語彙
- 松 本 公 一／珠光『心の文』の「和漢融合」と「わび」の展開
- 藏中しのぶ 安保博史／『茶譜注釈』補遺

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■(有)池上書店

〒175-8571 板橋区高島平1-9-1 大東文化大学2号館B1  
TEL: 03-3932-7567 FAX: 03-3932-7544  
E-mail: ike-book@smail.plala.or.jp

■汲古書院

〒101-0065 千代田区西神田2-4-3 西岡ビル4F  
TEL: 03-3265-9764 FAX: 03-3222-1845  
E-mail: kyuko@fancy.ocn.ne.jp

■大東文化大学内購買部(株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560  
TEL: 0493-34-4430 FAX: 0493-34-5622  
E-mail: info-daigakuten@shinmeido.co.jp

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平1-10-2  
TEL: 03-3937-0300 FAX: 03-3937-0955  
E-mail: tokyo@toho-shoten.co.jp

## 2022 年度 東洋研究所 秋の公開講座のお知らせ 「アジアの民族と文化」

主催：大東文化大学 東洋研究所

日程・テーマ・講師	講義概要
<p>11月10日(木) 13:00～15:00 『中国の歴史学と歴史書の特徴 —『史記』と『漢書』を中心に—』 東洋研究所 専任研究員 教授 小林 春樹</p>	<p>中国には神話時代から20世紀の清王朝に至るまで歴代王朝の歴史書(「正史」)が存在しており、正史の先駆けとなったのは『史記』と『漢書』[前漢王朝(前202～後8)の歴史書]であると考えられています。本講座ではとくに『漢書』と、そこに示された正史の特徴を中心として、中国の歴史学と歴史書とは如何なるものであるかをお話したいと思います。</p>
<p>11月17日(木) 13:00～15:00 『レオナルド・ダ・ヴィンチと古典古代 —東方・東洋との関連について—』 東洋研究所 兼任研究員 国際関係学部国際文化学科教授 田辺 清</p>	<p>「万能の人」と呼ばれているイタリア・ルネサンス期の巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519)の116冊以上に及ぶ「蔵書リスト」(『マドリッド手稿』Ⅱ他)からはプリニウスの『博物誌』を始めとする古典古代の書物が散見され、美術家のみならず哲学者・科学者としての実像が垣間見える。近年の研究に拠れば古代ローマの詩人・哲学者ルクレティウスの自然観が『岩窟の聖母』等のレオナルドの絵画作品にも反映されているという。 講師は予めからレオナルド絵画の東方・東洋的な描写について考察しており本講義ではレオナルドの蔵書から、その絵画や素描の制作背景を検討していきたい。</p>
<p>11月24日(木) 13:00～15:00 『中国とロシア(ソ連) —プーチンさん、あなたは憎む相手を間違えているのではないですか?』 東洋研究所 専任研究員 教授 岡崎 邦彦</p>	<p>現在、中国とロシアの盟友関係は軍事、経済を中心に強固になりつつあり、プーチン大統領は習近平主席にさまざまな支援を求めている。それとは反対に、アメリカ、ヨーロッパの北大西洋条約機構(NATO)を大敵のように言っている。なぜなら旧ソ連を崩壊させた要因を欧米西側諸国の陰謀としているからだ。しかし、旧ソ連崩壊の起因は1950年代～60年代の中ソ対立から、中ソ国境紛争にあったのではないか。現代史の視点から中ロ関係の実相に迫りたい。</p>

■会場：大東文化会館 3階 K-302 研修室

■受講料：無料

■交通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分

■定員：未定 ※ コロナ禍の動向を踏まえ決定

[問合せ先] 大東文化大学 東洋研究所

TEL：03-5399-7351 FAX：03-5399-8756 E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

### ※ 注意事項

- ・受付は先着順とさせていただきます。定員を超過した場合は、やむを得ずお断りの連絡を差し上げることとなります。あらかじめご了承ください。受付期間は、地域連携センターのオープンカレッジのパンフレットに掲載します。
- ・駐車・駐輪はできません。お車、バイク、自転車でのご来場はご遠慮ください。

新型コロナウイルス感染状況次第では、開催の中止や日程変更等の事態が生じる可能性があります。講座の中止や変更等が発生した場合、東洋研究所ホームページにてお知らせいたします。

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.77

2022年7月25日発行

印刷：(株) 東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>